

新収蔵 中村彝、洲崎義郎宛書簡類について

松矢 国憲

当館では、平成九年に中村彝展（註1）を開催し、彝の作品を紹介すると共に、彝の支援者の一人であった柏崎の洲崎義郎に送られた百二十点の書簡を書き起こし、図録の分冊として書簡集にまとめ、二人の深い交友を示した。それから十九年経た本年、彝が洲崎に送った未掲載の新たな書簡十七点、および彝関連書簡三点を加えた二十点（註2）を川崎道雄氏（註3）から御寄贈いただくこととなった（註3）。よって今後の中村彝研究に資するために、平成二十五年度から寄託されている同じく彝から洲崎に送られた書簡二点（寄託①②）（註4）および、大正九年十一月十四日付け彝の洲崎宛書簡に同封された、雨谷美文の中村彝宛書簡（平成九年の同展『書簡集』に未掲載追①）、とを加えて本稿に書き起こし、年月日不明の書簡が多いのでその内容から差し出し年月日を特定し、先の書簡集を補うものとする。

註1 平成九年（一九九七）十一月一日から十二月十四日まで。洲崎コレクションだった作品を中心に、彝の七十五点の作品と鶴田吾郎《盲目のエロシエンコ》および彝のデスマスク、そして彝から洲崎に宛てた書簡類で構成。

註2 『死んでも一枚の絵を描きたい 中村彝と洲崎義郎の軌跡』の著者川崎久一の御息息。

註3 その他の彝とは関連のない書簡、後年開催の展覧会案内状は本稿から除いた点数。

註4 寄託を受けた時点では、封書と書面とが組みの一点と思っていたが、今回の調査により、別日付と推定されることから二点とした。

凡例

- ・平成九年（一九九七）開催、中村彝展図録分冊の書簡集の凡例に従う。
- ・日付は次の順に優先順位を設け掲載した。
- ①書簡中の日付 ②封書記載の日付 ③消印
- ・書簡の文体は原文そのまま忠実に再現し、漢字は旧字体を用いた。ただし、明らかに誤りと思われる漢字は訂正した。また、独特の漢字の使用について正誤の判断のつかないもの、誤りではないが現在あまり使用されていないものなどには、脇に「ママ」と付記した。
- ・句読点は原文どおりとした。ただし、句点と思われる読点、及び、句点のない箇所は「」で表記した。
- ・書簡中に使われている次の変体仮名は、現在の五十音の仮名に改めた。
- ・多↓た ・可↓か ・春↓す ・爾↓に ・志↓し ・者↓は ・里↓り
- ・段落や改行されている箇所を必要に応じて／で示した。

① 大正六年三月十八日（推定）

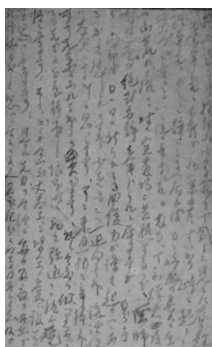
□・3・18東京・落合消印

官製葉書 鉛筆

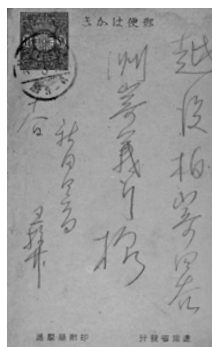
越後柏崎四谷／洲崎義郎様／新宿區局／彝／十八日

幾度となく、御親切な御見舞を頂戴してほんとに有り難う御坐いました。御影で病氣の方ハすつかり峠を起して終ひました。かうして静ニしてさへ居ればもう咯血の憂ハ全然ないと言つていゝ位ニなりました。尤も、丁度煩火後の山荒れの様ニ、時ニ突發的ニ發熱するので、醫師からは未だ絶對安靜を命じられて居りますガ、自分にはもう内部で日ニ日ニ新らたなる回復力ガ湧き起りつゝあるのがよく感じられますから、少なくともこゝ、一週間もしたら談話位ハ大丈夫ニなるだらうと思つてます。そして來月一杯も辛棒したらかなり元氣ニなれるだらうと楽しんでます。然し今度ハ假つよくなつても充分に自重靜養して根本的ニ病を□□シテ終ふ覺悟て居ります。そして、どうか今一度丈夫ニなつて皆さんの愛へ報い度いと思つて居ります。ほんとに先月の今頃ハ毎日毎夜の咯血で到底駄目だと思つて居たのに人の命程分らぬものはありませんね。

【註】 この書簡文頭に「幾度となく、御親切な御見舞を頂戴してほんとに有り難う御坐いました。御影で病氣の方ハすつかり峠を起して終ひました。」と書いている



①-裏



①-表

ことから、消印の三月十八日前に何回か見舞状を送られ、返礼の書簡を葬は送っていると思われる。大正六年一月十八日付け洲崎宛書簡に「この十二日の日二とうく大咯血をしてそれきり、臥たまゝで居ます」とあり、続いて、二十七日、二月二十日、三月八日と咯血や体調を記した書簡を送っている。二月、そして三月にかけて咯血と発熱が続く状況がそれらの書簡から確認でき、また、三月八日付けは、裏面に《小鳥の復活》（個人蔵）を描き「此繪は一昨日一寸坐る事が出来たので書きました」とあること、そしてその他の年では確認できないことから大正六年（一九一七）三月十八日と推定される。

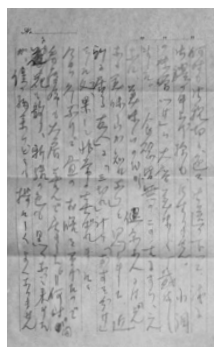
② 大正七年五月頃（推定）

日付不明

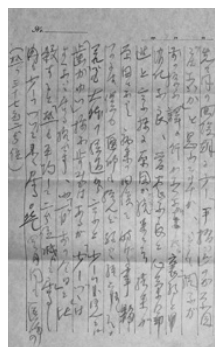
便箋(23・5×16・1cm)八枚のみ 鉛筆

（一紙）何時も御親切に、色々御送り下つて、誠に御禮の申し上げ様も、御坐いませぬ。小鯛の味噌つけ」ハ大層美味しく頂戴致しました。食欲皆無のこの舌すら、こんなに美味しいのだから健康な人には「どんなに美味しいか知れない」と思ひました。近所に居る友人」に「三切れ」計り「おすそ分け」をした處、果して非常に喜ばれました。／今日ハ久しぶりで晝のお膳を平らげたので看護婦も大層喜んで居ました。〓何時の間に力花も散り、新緑の色も黒くなつて來ましたが、僕の病氣ハどうも捗々しくよくなりません／

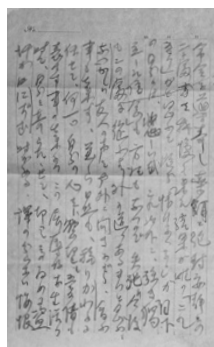
（二紙）先々月の回復期に少し醫師の甚□の弱□「手摺つた」のガ原因ではないか」と思つてますが、どうも調子ガ前の様な譯に行かなくなりました。衰弱と消化不良、營養不良と心氣昂進と言ふ様に原因ガ結果となり結果ガ原因となつて病氣の回復を妨げる事夥しいのには僕も醫師も殆んど弱つて終ひました。それでも大牀の経過から言ふと少しハ〓ほんとに「齒がゆい」様に歩みではあるガ「少しづつ、」はよくなつて居る様です。「一ヶ月前の今日」と比較すると「熱も平均して二分位減じて居るし肉も少しハついて來て居る。（熱は三十七度二分位）然し四ヶ月間も醫師の／



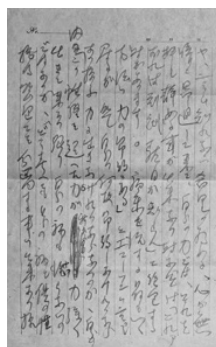
②-1



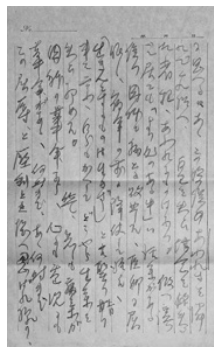
②-2



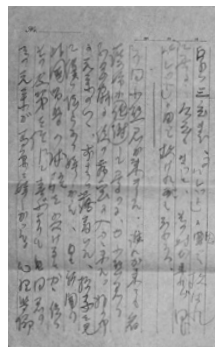
②-3



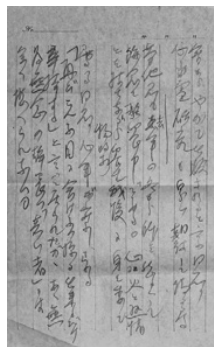
②-4



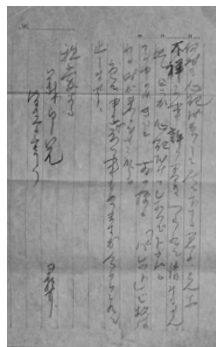
②-5



②-6



②-7



②-8

（三紙）命令を遵奉し藥餌と絶對安靜との二處方を我慢して來た結果ガ唯の「これきり」かと思ふと随分「情けなくなる」ガ目下の自分には、悲しい哉これ以外ニ、強き「獨立した信念」も方法もないので矢張り今後もこの處方に従ふより外に道ハあるまいと思ふ。なつかしい友人の聲を戸外ニ聞きながら、會ふ事も出來ず、美しい自然も移りかわるに任せて、何一つ自分の心を、慾望も愛情も表はす事の出來ないこの屈辱的な生活ハ時々、自分を苛らた、せて、却つてその爲めに盗汗かにぢむ時がある。譯の分らない悔恨／

（四紙）や、言ひ知れない希望の爲めに、心ガ無暗ニ昂進して來て、自分の力では、そ

れを押し静める事が出来ない時などは「これアおれは到底駄目か知らん」と絶望する時があります。病氣を治すに最もい、方法ハ力の節約ニある」とエマーソンハ言つて居るガ然し自分ハ何故節約しなければならぬ様な力に生きなければならぬのか、自分の内に「この性格を超へた力ガ新たに力強く生きて来ない限り自分の病も治らないのではないか、「どう考へても自分の病と僕の性格的慾望とを分離する事ハ出来ない様／

(五紙)に思へる。あ、この頃ハ僕のあわれさを憐れ(ん)でくれ給へ。自己を失ひ信念を失つた者程、あわれなものはない。假へ培つて居ても「よい處のある中」ハ活氣がある僕ハ肉躰と病とに敗北した。醫師に屈服し、宿命の前に降伏して終つた。「生さんとするものは生きず」とした聖ハ旨い事を言ふ。自分もかくしてどうやら生氣を失ひ初めた。然し、若しも病氣ガ肉躰の革命なら、心にも□□にも革命がある。何時まで、あ、何時までこの屈辱と、壓制とを懷へ忍はれ様？／

(六紙)自分ハ三度まで、「パレット」に因つて救はれて居る。今度もきつと、その時が来れば同じ「パレット」に因つて救はれるのも□□。／(一行線で区切りあり)／この間小熊君が來ました。誰れが來ても看護婦ガ謝絶して居るのに、小熊君ハ不思議に僕の病室に入つて來た。非常に元氣のい、前よりハ落着いた、様子を見て僕ハ堪らなく嬉しかつた。日々新聞の外國留學の體驗を受けるとか、僕ハその及第を信じて喜ぶよりも同君のその元氣ガ馬鹿ニ嬉しかつた。心理學協／

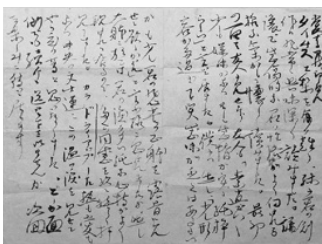
(七紙)會からやがて出版されると言ふ同君の心靈研究も自分ハ期待して待つ(て)居る／(一行線で区切りあり)／夢地君も去年の冬から躰を悪くして□君と靜養中である。心に火と熱情とを持ちながら養生□後に身を委て居る同君の物的な心命が□□される「再びこんな目に會はない様に出来るだけ辛棒する」と言つて居られたガ、あ、無爲無念の靜養ハ「若い者」には全く堪へられない。／(八紙)何時も心配ばかりして居て下さる君に、こんな不詳な事許り書きつらねて済みません。然しどうか心配だけハしないで下さい。その中にはきつと、前の様に「パレット」で救はれる時ガ來るでせうから。／色々申上げ度い事もありますが今日ハこれにて止ませう。／親愛なる義郎兄／葬／皆さんに宜しく

【註】六紙から七紙めに続く「心理學協會からやがて出版されると言ふ同君の心靈研究」は、大正七年(一九一八)、心理學研究会出版部から出版された小熊虎之助著『心靈現象の問題』を指すものと思われる。一紙めに「何時の間にカ花も散り、新緑の色も黒くなつて來ました」とあることから、五月頃と思われ、二紙めに「二ヶ月前の今日」と比較すると「熱も平均して二分位減じて居るし肉も少しハついて來て居る。(熱は三十七度二分位)」とあり、大正七年四月九日付け洲崎宛書簡に「この間から少し調子にのり過ぎたのが降つたのでせう。ひどい熱を出して今日で丁度十日許り臥て居ります。」とあることと、ほぼ整合することから大正七年(一九一八)五月頃の書簡として推定できる。小熊虎之助は、柏崎出身、後に明治大学心理学教授。東京帝国大学文学部哲学科で心理学を修め、在学中、日暮里本行寺での靜坐会で相馬黒光と一緒に坐る葬と出会い、その後、中村屋で葬に洲崎を紹介し、交友が始まる契機を作った。

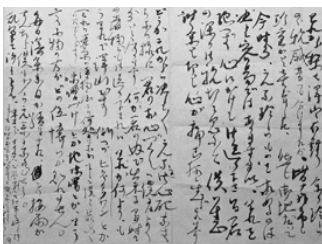
寄託① 大正七年五月から七月頃(推定)

日付不明

半紙(24.1×32.4cm)二枚 墨



寄託①-1



寄託①-2

(一紙)愛する義郎左ん／タイムスと梨を有り難う。殊ニ君の創作ハ非常ニ興味深く讀みました。謙讓で感傷的な君の性格がよく伺はれる様な氣かして懐しく讀みました。最初の一回を友人に見せたら友人も「素直でい、少しも嫌みかない。そして感情ガ實に純粹らしい」と言つて居ました。僕にハ然し、「少し形容が多過ぎて實感味が乏しくはあるまいかも少し君の悲苦の正躰を露

骨二見せて欲しかつた」と言ふ様二思はれましたが、然し大牀ニ於ては君の涙多い純な心持がよく現はれて居るので、多くの同感を以て嬉しく拜見しました。カラドライアップした熱も愛もない中央の文士連二この温い涙を見せてやり度い等々思つたりしました。どーか面倒でも續けて送つて下さませんか。次回を楽しみ二待つて居ます／

(二紙)それから梨を澤山二有難う。餘り珍しいので親戚等へも分けましたが、皆ナ非常ニ珍重かつて喜びました。然し御地だつて今時分、こんな珍しいものを求めるのは決して容易ではありません。それを絶へず心にかけて御送り下さる君の深い御親切を思ふと僕ハ感謝ニ餘つて却つて心が痛む様ニ感じられます。どうかこれからハ決して／＼こんなに御心配なさらない様に君のお心づくしハ僕にはよく分つ居ります何か君の内て出来るその時々物でも御送り下されバそれか何より、もうそれで澤山です。例へバヒネタクワンとか(これハ東京の漬物屋ニハ何處にもないそして僕ニハ最もいゝのだそうです)味噌づけとか地味噌とか、そう言ふ物の方がどの位懐しいか知れません。／毎日陰氣な日か續きま須、この梅雨がすんたら僕も少しハ元氣になるでせう。／亂筆を許して下さい。末ながらタイムスで君のマダムの記事も嬉しく拜しました。何時かお會する時があらうと楽しみニして居ます。どうぞ宜しく(葬)

【註】 寄託①と後掲の寄託②の封書は、組みの書簡として寄託を受けているが、消印と書簡内容とにズレがあることから別の書簡とした。書簡中に「タイムスと梨を有り難う。殊ニ君の創作ハ非常ニ興味深く讀みました。」とあり、洲崎の創作が連載中であることが窺える。越後タイムスに連載した洲崎の創作とは、大正七年(一九一八)五月十九日に始まり、二回目が二十六日、以降六月二日、九日、十六日、二十三日、三十日、七月十四日、そして二十八日に第九回で連載終了する「創作 涙痕」のことと思われる(他に連載の文学記事はない)。「最初の一回を友人に見せたら(中略)どーか面倒でも續けて送つて下さませんか。次回を楽しみ二待つて居ます」ということから、まだ連載が終了していない時の書簡と考えられ、早くて、二回目の送付前、遅くても終了前とすれば、寄託①は②の封筒の消

印より早い大正七年五から七月頃の書簡と考えられ、書簡終わりの方に書かれている「毎日陰氣な日か續きま須、この梅雨がすんたら僕も少しハ元氣になるでせう。」という「梅雨」の字義通りの季節とも合致する。

③ 大正八年六月一日から十三日の間(推定)

□・6・□消印

絵葉書 ペン

越後柏寄／洲寄義郎様／下落合四六四／中村葬

大分暑くなりましたね。別の皆さん御變りハありませんか。僕ハ未だに齒醫師に通はせられて居ります。あと三回だけはどうしても通はなくてははいけないと言ふのです。陽氣のせいかこの頃ハ牀の工合が悪るく、隔日に通ふのが實に苦しくなつて來ました。(熱も三十七度、八、位ありますが何よりも咳と痰とガ頻發するのガ癪です。然し食欲だけハ次第二旺盛になつて來ました)もうヒトイキだからと思つて、勉めて瘠我慢を出して居ますガこの頃ハ心からウンザリして居ります。早くこの方をきりあげて製作に没頭し度いと思つてます。遅くも十五日までニはこの方も完成するでせうから五日間許り休養する事として、この廿日頃から初めませう。大分暑くなつて來たから。コスチュームをしてポーズするのガさを苦しいだらうと思はれます。今晚に龍門氏等の展覽會がありますガこんな工合で見二行く勇氣かない。ピアストロもとても聞かず終ひ。

(裏面)第四回二科美術展覽會出品／洗髮 坂本繁二郎氏筆



③-裏



③-表

【註】 絵葉書裏面の図版が、坂本繁二郎《洗髪》で、第四回二科美術展覧会は大正六年

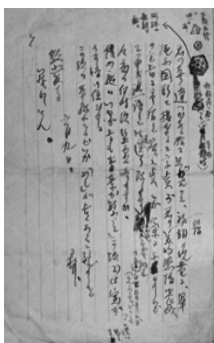
九月十日から三十日上野竹之台陳列館で開催であることから、同六年（一九一七）九月以降となる。文中に「遅くも十五日まで二はこの方も完成するでせうから」とあることから、書簡は消印で六月と判るので、同七年（一九一八）以降の六月上旬に書かれたと推察される。一方文末に「今晚に龍門氏等の展覧會がありますガ」とあり、同七年であれば第五回二科展と同期、同場所で第五回再興日本美術院展が開催されており、保田龍門も《肖像》《男》が一般人選している。再興院展は毎年この九月中、下旬に開催され、龍門は同八、十三年の同期にも出品している（九一十一年は渡欧、十二年は関東大震災で中止）。同六年の繁二郎の絵葉書であり、後出の⑮が第八回二科展の安井曾太郎作品の絵葉書で同十一年（一九二二）とすると、それまでの間の使用と推測できる。同八年（一九一九）六月十四日付洲崎宛書簡に「齒の治療ハ確ニ失敗でした。乗りかけた船とは言へ、考へると餘りに犠牲が多過ぎた様です。未だ式回通はねばならないからどうしても十六日でなければ完成しません。（中略）そこで廿一日頃から初めるとして」とあり、この書簡の「遅くも十五日まで二はこの方も完成するでせうから五日間許り休養する事として、この廿日頃から初めませう」の一日遅れと整合する。保田の出品とも整合することから大正八年（一九一九）六月一から十三日の間の書簡と考えられる。

④ 大正八年六月九日（推定）

年不明六月九日

便箋（21・5×13・8 cm）一枚のみ ペン

三角立體／ハ（※四面体の図あり）／四つの面／無數の圓の面ハ／（※ラセンの図あり）（ラセン）圓スィ形的）／（※多面体の図あり）↓圓球ハ／無數の面。



④-1

君の考違いかある様に思つたのと、初期の兒童に、單純な圖形を描かせると言ふ點が君の□□美的感情養成の主旨に矛盾して居つた點とガ氣になりましたガその中を熟讀して御□送り致します。主に文字や假名の違ひがありましたガ（こんな事ハどうてもいゝと僕ハ思ひます今度ハ何時頃御上京になりますか。／僕の庭ハイヤガ上にも青葉ガ繁つてこの頃では室ガうす暗い位です。／この頃ハ草疲れてるせいカ「めし」ガ旨くなくて弱りました。／六月九日／葬／敬愛する／義郎兄

【註】 洲崎が葬に送つた兒童自由画教育論への葬の所見を述べたものと思われるが、

その論は不明。洲崎が比角小学校で兒童自由画教育を進めるのが大正八年（一九一九）からで、葬は病のため来ていないが、曾宮一念、鈴木金平らが翌九年以降、比角小学校で指導をしている。洲崎宛同九年（一九二〇）六月九日付書簡は別にあり（『書簡集』掲載）、同十年六月十一日付書簡には「この間は恐ろしく、いきなゆかたを今度ハ又鯛の味噌つけを有り難う御坐いました」とあり、六月九日には整合性がとれないので、この二年は除かれる。「僕の庭ハイヤガ上にも青葉ガ繁つて」と画室のことを書いているので、画室ができて遠くなく、兒童自由画教育を始めた頃、大正八年（一九一九）六月九日と考えられる。

寄託② 大正九年一月七日

大正九年一月七日消印と一月十一日消印

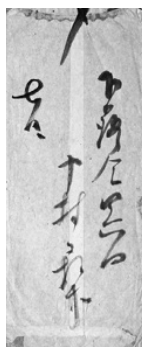
定型封筒 墨

（表）越後柏寄／洲崎義郎兄／

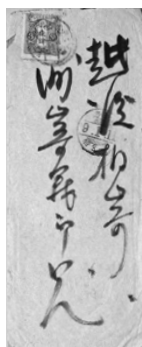
（裏）下落合四六四／中村葬／七日

【註】 前掲の寄託①の書簡と共に寄託を受

けているものだが、書簡内容と消印とのズレがあることから、別の書簡と判断した。本封書に入っていたであろう書簡は未見。



寄託②-裏



寄託②-表

⑤ 大正九年一月十八日(推定)

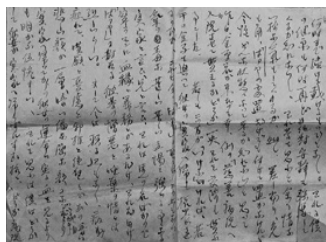
年月不明十八日

半紙(24・1×33・0cm)四枚

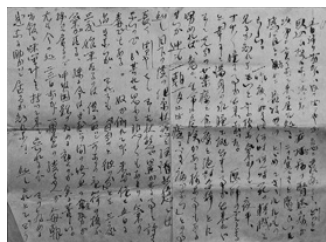
ペン

(1)五日許り前からハ内の
ばアヤガ、急ニ發病して、
どつと臥込む様になつて終
つた。持病の腎臓病ガ／次
第二重くなつて來て居た處
へ、この寒さと隅々ひいた
感冒との爲めニ最後のとゞ
めをさゝれたものらしい。

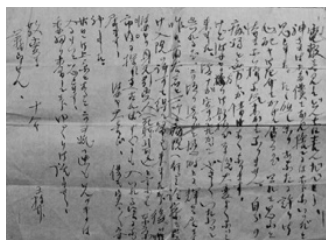
一昨夜の如きは何時何時
死の轉機を見るか知れない
と言ふ様な氣かして、夜中、
オチ／＼睡る事が出来な
かつた。醫師の言によると「幸
にして満身の水腫を據出す
る事が出来ればそして充分
の藥療と食療と絶對安靜と
に努めれば、急ニ、生命に危險がある様な事もあるまいガ迎も一朝一夕には癒るべき
病でない」との事然し目下の僕の健康状態と經濟状態では長くはアヤそしてとした
状態で置かせる事を許さない」ので、其れを思ふと悲しくもあり、氣の毒でもある。
奴ガ倒れてから未だ僅ニ五日に過ぎないガ、それでも『自分のと彼の分』とを三度三
度始末するのは僕に取つて可なりの重荷の様な氣ガする。殊に今は、まだこの間の
咯血の餘勢ガ残つて居るので呼吸困難の爲めに動くのガ實に苦しい。尤も今の處
二三日前から曾宮の綾ちゃんガ毎朝御飯と味噌汁とを持つて來て呉れるのでその爲
めにどんなに助かつて居るか知れない。然しこれでも「そう／＼



⑤-2



⑤-1



⑤-4



⑤-3

(2)何時まで續けて戴けるものでもなし。それに僕の健康も何時再び絶對安靜を強
要してくるか知れないし、それ等を思ふと餘り情ない様な氣もしてくるか、然し、差
し當り、兎も角、ばアヤの處置だけでも付けて置かなければ今後どんな状態ニなつて
來るか知れない」と思つて昨日、金原君ガ來たのを幸、例の「慈善病院へ入院させて貰
えるかどうか」一決それを交渉して貰ふ事にした。若しもこの方ガ「いけなければ、若
干の金子を與へて彼女の實家へ歸して攝養させるのだが、これは全く「ばアヤ」ニ取
つてはこの上もない氣の毒な苦しい苦しい立場を強いる事ニなる實家と言ひ、兄と言
ひ、それはほんの名ばかりで寧ろそこに血縁と義務とガあるだけ、それだけ「ばアヤ」
に對する彼等の憎惡と唾棄の情とは烈しいらしい。まして今は頼る邊もなく、病み疲
れて、嘆願と憂慮と邪推と絶望とで、あの暗い悲しい顔ガ一層、暗い偏屈な顔になつ
てるのだから實家へ歸つてからの彼女の運命ハ實に血を見るよりも明かな位慘まし
い、それを思ふは僕はどうかして彼女ガ實家へ歸らずにすむ様ニ。どうか病院／＼

(3)癒るか死ぬか、出来る様に」と今ハそれ許りを神に祈つて居る。可愛い、偏屈な
ばアヤ。お前の病弱と老と無力とは、次第にお前の頑固をほゞいて漸く人生の會得
ニ導きつゝ、お前の魂に初めてのすが／＼しい喜びと輝かしい自由とを蘇生らせ、
カ、つて居たのに、あ、これからは、その同じ病と老と無力とガ再びお前を運命の
針の床へ追ひ込まうとして居る様ニ見へる。／＼處で「はアヤ」を處理して終つた後の
事ですガ、若しもこゝで僕を世話する人ガ居なくなつて終ふ」となると當然、あの例
の神田の「オバサン」ガ押しかけて來るのですガこれは全く、僕には「僕一人で一
切の不自由と苦痛を忍ぶ以上の苦しみなので」この親切だけは斷じて、今度こそは斷
じて拒絶しなければならぬと思つて居るのです。然しこの女中拂底の折柄いかに
東京中の口入屋を探し廻つたとて迎も急場の間には合ふまいし。友人に頼んで見て
も詮ない事だし。この點については僕もほと／＼窮しまつて居るのです。尤もこゝ、
一週間位ハ(殊に自分一人だけになれば)自炊生活ガ出来ない事もないガ、それも健
康如何で何時まで續けられるかは保證出來ませんから／＼
(四紙目には番号無し)電報を拜見してどんなに喜んででせう。神さまは未だ僕をお
見捨てにはならないのだと／＼思ひました。た、然し餘りあなたに許り御心配や御厄
介をかけて居るのでそれを思ふと濟まない様な氣かしてなりません。自分の病弱と

無力とガ情なくなります。／けど婆ヤの方ハ御影様でその後大變よくなつて來ました。皆ナガ寄つて、たかつてやさしくいたわつて／呉れるので、この頃ハ喜びと感謝とに輝いて居ます昨日、雨谷君と一所に病院へ行つて診察を受け入院の許可を得て歸つて來ましたから後ハ唯だ／婆ヤの身元引受人(死躰引取人)と言ふのを、東京市内に探しさへすればすぐにも入れる筈になつて居ます。婆ヤ大喜び、僕も實ニ／安／神しました。／廿日ニ御上京とするとこの手紙ハ迎も兄の手には／入るまいと思ひます。委細ハ御會してからゆつくり御話しませう。／敬愛なる／義郎兄／十八日／葬

【註】「ばアヤ」の「土田とう」は、大正八年(一九一九)十月頃から翌九年四月頃まで、

洲崎の紹介で柏崎から出かけ、葬の身の回りのことをした。同九年(一九二〇)

一月二十一日井原彌生宛書簡(『芸術の無限感』所載)に「去年いらした時に居た婆やは、持病の腎臓病がひどくなつて、十日許り前に倒れたので、知人に頼んで一昨日東京の施療病院へ入院させました」とある。「十日許り前」とすると一月十一日前後に倒れたこととなる。この書簡では「五日許り前」とあるので、一月十一日に五日を加え十六日になる。十八日の手紙なので、「許り」という含みを考えれば、この二日は許容できると思われるので、大正九年(一九二〇)一月十八日と考えられる。

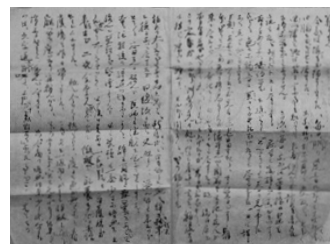
⑥ 大正九年四月一日(推定)

日付不明

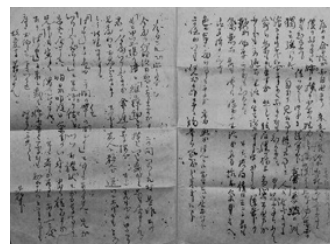
半紙(24・1×33・0 cm)二枚のみ ペン

(一紙)義郎さん／今度は随分御待ちしました。毎日、門の登音に耳をそばたて、は胸をおどらせて居ました。あなたのお葉書を受取つて、とう／國へ歸つて終はれた」と言ふ事を知つても未だ何だガ訪れて來られる様な氣がしてなりません。この頃ハ毎日なかば夢の様ニ晝も夜もた／ウトウトとして居ります。疲勞と陶酔とガ晝かき

出す取りとめもない幻覺を追つていくどんよりとした春の光の中にひゞく色々な物音に頭をかたむけたりして居る中に一日は譯なく立つて行きます。／丁度、あなたがいらしたのが先月の二十七日ですから、その翌



⑥-1



⑥-2

日です。朝からどうも工合が悪い様ニ思ひましたが鹽井さんや岡君やその他の友人が來て居たのでつい無理をしておしやべりをして居ました。處へ福田君と曾宮君がやつて來て更に「メートル」を上げたのが悪るかつたのでせう。この二人ガこれから洲崎さんの處へ行つて來る」と言つて、額縁等を持つて歸つて終ふと、それから間もなく、「やり初めました。初めハ大した事もあるま以と思つて、新聞紙ニはき出した血を、靜かに始末で横になつて居ましたが日歿頃になつて又烈しく、溢れ出して來たのでとう／太田さんに頼んで醫師に注射を乞ふ事ニしました。／幸、注射後の經過ハ非常ニよく、靜に兩肺ニ氷囊をあて、殆んど翌朝まで昏睡しました。そして翌朝も一度少少な咯血をしましたガもう大した事ハなく、その後ハよくなる一方でした。看護婦ガ來るまで二晩金平さんが來てくれて徹夜で氷囊その他の世話をしてくれました。然し今ハもう熱も下り、痰にも色ガ無くなつて、看護婦も昨日歸しました。これであと一週間もかうして靜臥して居たら庭へ出て、座つたり床轉んだり、そゞろ歩きながら空を見上げたり出来る様ニなるだらうと、樂んで居ります。只、今度の咯血以來少し閉公したのは、文字通り閉口して、聲ガ「よく出なく」なつた事です。尤もその／

(二紙)爲めの會話が不自由ニなり來客との談話が不可能になると言ふ事に僕の弱ハまつた肺と残り少ない精力とを保護する上から必要なのかも知れない。位ハかうして次第に運命から寡黙と孤獨とを強いられ、自分の見た事感じた事を人に訴づるのに繪によらなければならなくなるのかも知れない。かう思ふ事ハ少し寂い氣もしますガ然し、結局僕の様な多感な男ガ少しでも至純な生活に生き様とするにはかうした

運命の鞭が必要なのかも知れない。そして、結局僕はそこに最も氣樂な最も嬉しい賑かな生活がある様な氣さへする様に思ふ。／色々書き度い事もあるが未だ血がほんとにおさまつて居ないのでこの位かいても何んだか非常に胸苦しい氣がして來ましたから今日これで止します／今度ハ何時頃御出で二なりますか。この間いらした時は非あの「もとゆい工場」の繪と「雉の靜物」とを持つていつて戴かうと思つて居ました。若し今度いらしやるのが餘り遅くなる様で、そしてそれまでにゆつくり見度いと思ひとなるならその中二友人ニ頼んで送つて上げてよろしう御坐います。／「ばアヤ」には未だこの間のイモの「オレイ」を出してありません。兄ガ「いらしやるだらう」とそれ許り待つてつい御禮狀をか力せる事を忘れて居ました。明日か明後日氣分のいゝ時ニ書く積りですガ兄からも宜しく傳へて下さい。そして若しかするとあと一度あの「ばアヤ」に來て戴く様な事二なるかも知れないと言ふ事も卒とお仰つて下さいませ／皆さんニ宜しく／葬／敬愛する義郎兄。

【註】 この書簡は、洲崎の依頼で元比角小学校教諭粕川一雄が昭和四十五、六年（一九七〇―一）にかけて現代仮名遣いにして書簡を書き起こした粕川ノートに大正九年四月一日付けと記録されていた書簡の原本で、未見だったもの。平成九年（一九九七）の中村葬展時には、行方不明だった。原本には日付の記載が無く、封筒もないため、日付は特定できず。書簡中「もとゆい工場」については、大正八年十二月十四日付洲崎書簡に「今は毎日、裏の「もとゆい工場」を十二號に描いて居ます」とある。また、「雉の靜物」（茨城県近代美術館蔵）は、同九年五月十七日付洲崎宛書簡でも「あなたに今度差上げる筈になつて居るあの風景（もとゆい工場）と雉子の靜物とによつていくらかでも融通して戴ける様なら、それによつて一ヶ月でも餘計にもちこたへて」とあり、粕川の伝える四月一日として差し支えないだろう。粕川ノートで文字の不明だった部分も判明した。

⑦ 大正九年九月二十三日（推定）

消印不明

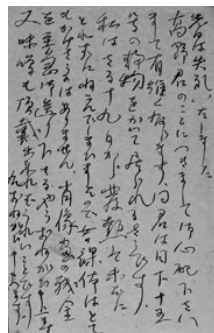
官製葉書 ペン

越後柏崎町四谷／洲崎義郎様／東京府下落合四六四／中村葬／九月二十三日

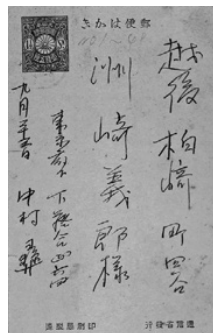
先日は失禮いたしました。高野君のことにつきまして御心配下さいまして有難く存じます。同君は目下十五號の靜物をかいて居られるさうです。私はさる十九日から發熱して未だにとれずにねこんでしまいましたので女の裸體はともかけさうにはありません。肖像畫の殘金を至急御送り下さるやうおねがひ申上ます。又味噌も頂戴出來ればうれ（し）いことです右おねがひ申上ます。

【註】 「肖像畫の殘金」とあるが、洲崎に關係

する肖像画は、大正六年（一九一七）の《西卷時太郎氏の肖像》か、同八年（一九一九）の《洲崎義郎氏の肖像》、同九年（一九二〇）の《エロシエンコ氏の肖像》の三点。《西卷時太郎氏の肖像》は、同八年十月に描き十二月末、洲崎に送っている。《洲崎義郎氏の肖像》は、同八年十一月に描き、翌九年七月に柏崎の洲崎の下に送られている。九月二十三日付け本書簡の「肖像畫の殘金」の要求はこれをさす可能性が残る。《エロシエンコ氏の肖像》は、同九年九月九日から十六日まで描き、すぐに倒れたとされ、「私はさる十九日から發熱して未だにとれずにねこんでしまいましたので女の裸體はともかけさうにありません」とあることと、若干の齟齬がある。しかし、同九年九月二日付け洲崎宛書簡に院展に特別陳列されたルノアールとロダンの作品を見て「極度に興奮せしめ狂喜せしめて、昨夜は丸で一睡も出來なかつた。（中略）どうしても人間も、裸體を、その生命を、強調して、ナマ／＼しく表現し度い。（中略）僕ハ〇今か



⑦-裏



⑦-表

らどうかしてい、「モデル」をみつければならない。それを得る爲には、多くの金も惜しまいと思ふ。(中略)僕ハ今ハ牀の事も何も考え度くない。たゞ、一直線に、前進する許りだ。」と書いている。また、九月四日付け井原彌生宛書簡(『芸術の無限感』所載)に「來週からは「モデル」を雇つて裸體の研究を初めて見度いと考へて居ります。そしてこの秋こそは、永年の希望を多少實現して見度いものだと思つて居ります。考へると胸が躍ります」と書いていて、裸體(裸婦)研究にしようと思つていたことが窺える。そして、同九年九月二十七日付け洲崎宛書簡に「金有り難う御座いました。只今嬉しく落手致しました。病氣ハどうも思はしくありません。熱と咳と痰と下痢と少しも衰へないので殆んど衰弱しきつて終ひました。(中略)エロシエンコの肖像ハ今の處五百圓以下では手放し度くないと思つて居るのですが、若しそれでよろしかつたらその旨すぐ御返事を願ひます。(中略)味噌ハ今つきました相です」とあり、残金と味噌の無心に合致する。そして同九年十月二十八日付け洲崎宛書簡で《エロシエンコ氏の肖像》を今村繁三が欲しがっているという書簡の中で「あの繪の所有權は既に大半、あなたにあるのですから、あなたが「嫌やだ」と言へば無論私ハそれに従ふより外はありません」と、所有權の大半が洲崎にあるのは、五百圓のうちの一部を既に支払っているからと思われ、九月二十七日付けにある「金有り難う御座いました」と言っているとは解釈できるのではないだろうか。とすれば、この「肖像」は《エロシエンコ氏の肖像》の可能性も残る。「肖像」がどちらか特定できないが、いずれにしても、本書簡はその残金を要求する大正九年(一九二〇)九月二十三日書簡と考えられる。

⑧ 大正九年十月十八日 洲崎義郎から妻マサ子宛

9. 10. 18 消印

絵葉書 ペン

新潟縣／刈羽郡比角村／洲崎マサ子様／在京／洲崎義郎

別に變りもありませんか。私も達者で居ます。葬さんの繪を差上ります。まだ本物は見ませんからなんと云ふ事は出来ませんがあれで見ても葬さんの天分がはつきり伺はれます。東京は昨日は雨でした。／新一が仙臺から上京したので保坂君の所へ兩人で行つて來ました。私迄せつない感じがしました。／留守に氣を付けて下さい。／左様より

(裏面)帝國美術院第二回美術展覽會出品／エロシエンコ氏の像 中村葬氏筆

【註】《エロシエンコ氏の像》は洲崎に贈られるものだったが、上京中の洲崎はまだ見ていないことが文中からわかる。第二回帝展は大正九年(一九二〇)十月十六日から十一月二十日に上野公園竹ノ台陳列館で開催されている。この十日後の十月二十八日付け洲崎宛書簡には、今村繁三がこの作品を欲しいと言いだし、仲介の中村春二を通して今村に譲つても良いか、洲崎に「無理な願ひ」をする書簡が残っている。

追① 大正九年十一月九日 雨谷美文から中村葬宛

9. 11. 10 消印

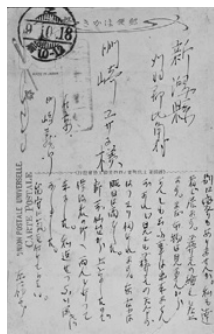
官製葉書 ペン

府下下落合新田四六四／中村葬様／水戸市上市天王町九一六／雨谷美文／九日

祖父が大病の爲二日に北府⁷に來て居りましたが終ニ藥名の巧もなく九日午后六時に永眠せられました私には遺憾^マな事でもありません^マけれど運命と思へばあきらめより外に



⑧-裏



⑧-表

術ありません／歸北の際例の古事記を本屋に十六圓五〇錢で抵當に入れてありますがい、本ですから洲崎様に例の願が出来ませんかしらん期日は今月一ぱいの先づですから御心配を願います

【註】 大正九年（一九二〇）十一月十四日付け

洲崎宛書簡に同封された葉書。平成九年発行の『書簡集』には、葬と洲崎との間での書簡ではなかったので掲載しなかった。葬は洲崎に「若し、君のところにその本がないならば一本そなへて置いてもいい、だらうと存じます」と勧めている。次の⑨の日付特定に結びつくためにここに記す。

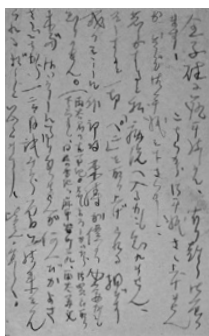
⑨ 大正九年十一月二十七日（推定）

消印不明 年月不明 二十七日

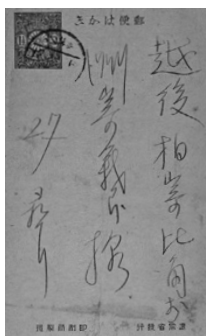
官製葉書 ペン

越後柏崎比角村／洲崎義郎様／27／葬

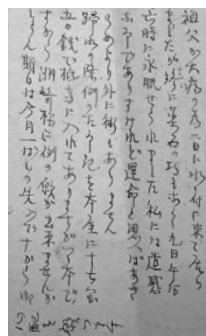
金子誠に落手致した。有り難う御座います。こちらから御手紙さし上げませんがどうぞ御手紙を下さいますし。／若しかすると私、病院へ入るかも知れません。／そうすると一切「ペン」を取り上げられる相です或ハそうした外部的束縛が僕にハ必要かも知れません。（雨谷君の古事記。若しよろしかつたら御買ひ取り下さいまし。同君の番地ハ麻布谷町三九、雨谷美文／未だはつきりした事ハ分りませんが何んだかよささうてすから一二ヶ月試みたら□□ハ□氣□□見られる□□□と□□みました皆さんニ宜しく。



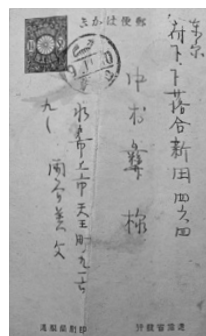
⑨-裏



⑨-表



追①-裏



追①-表

【註】 大正九年（一九二〇）十一月十四日付け洲崎宛書簡に雨谷美文所有の「古事記」を勧める手紙があり、それに同封された雨谷から葬に宛てた葉書が十一月九日付けである。「洲崎様に例の願が出来ませんかしらん」とまだ洲崎にはお願いしていないことから、大正九年（一九二〇）十一月二十七日の書簡としてよいだろう。

⑩ 大正九年十二月十一日（推定）

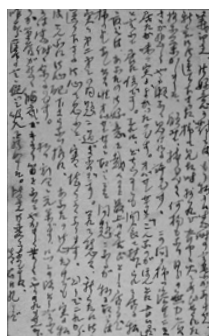
□・12・11東京・落合消印

官製葉書 ペン

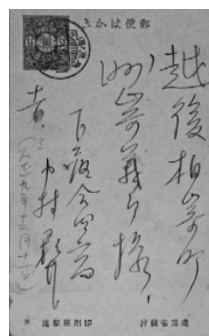
越後柏崎町／洲崎義郎様／下落合四六四／

中村葬／十一日

義郎さん、御好意に對しては、もう私に感謝の言葉がありません。新らたに御送り下さった、柿を見た時、私ハ丸で脊中ニ火をあびせられた様な氣がしました。顧みて、捧ぐべき何物もない自分の無力と貧さとガ悲しくやる瀬なく思はれる許りです。この間の柿ハ溶けてこそ居たガ味ハ實に、よかつたのです。オバサン等も「こんなのガほんとに旨いのだ」と言ふて居た位です。それに、どちらにしても間食を禁じられて居る私ニ取つては、あなたの御好意を戴くのを最上の喜びとして居るので柿のよしあし等ハ唯オバサン等ニ取つてこそ問題ニなるガ私に取つては實ハ第二第三の問題ニ過ぎないのです。それを悪く、新らたに御送り下さる御心を思ふと、實ニ堪らなくなります。どうぞこれからはこんなに御心配下さらない様に、あなたの御心だけでも實に私には感謝ニ餘るのです。私ハ割合ニ元氣です。只この頃そう言ふものが氣管ガ悪く胸底ガキウ／＼笛をふいてやかましく苦しくてやりきれませんから昨日から醫師の言ニ従つて吸入を初めました。皆さん御變りハないですね。／先ハ右御禮まで



⑩-裏



⑩-表

【註】書簡中の「オバサン」(岡崎きい)は、大正五年(一九一六)八月下旬頃から葬の世話をしたとされる。他の説明は、次の⑪に併せて記載。

⑪ 大正十年一月か二月、二十四日(推定)

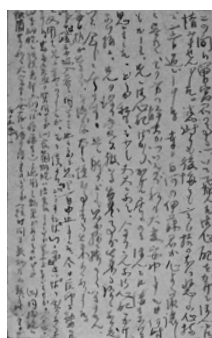
消印不明

官製葉書 ペン

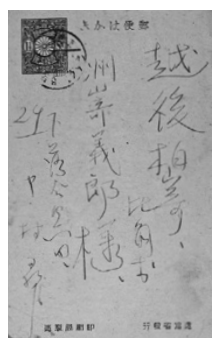
越後柏寄／比角村／洲崎義郎様／

下落合四六四／中村葬／24

この間ハ曾宮君の事二ついで飛んだ御心配を
かけてほんとに済みませんでした。感謝とも
後悔とも言ひ様のない悲しい心持で二三日過
ごしました。幸、白河の伊藤君が心よく承諾
して呉れて、その方の解決がついたので私も
大變安神しましたガ「何時もかうして、兄ニ御



⑪-裏



⑪-表

心配ばかりかけて居るのをほんとに済まないと思ひました。どうか私も、もう少し丈
夫二なつて、餘りこんな御心配ハかけない様に、兄の深い愛に報いる事が出来る様ニ
なり度いと念じて居ります。然し躰ハどうも思ふ様ニ捗々しくいきません。毎日熱が
出るので、この頃では本を讀む事すら出来なくなりました。昨日は酸素吸入器を用
いるのを止さうかと思つて一と中止しました。今日醫師に勧められて又用ひて見る
氣二なりましたガ、もう僕にハ『どうすればいいのか』さっぱり分らなくなりました。
甚だ突然の質問ですがガ(一)食菌細胞ハ培養する事が出来るものでせうか。(人工的
に)(二)その細胞を結核患部ニ直接に例へば痔瘻等ニ適用し効果があるものかどう
か(三)同細胞ハ微菌等の如く大空中ニ生存を續け得るものでせうか(短時間ニ數秒乃
至數分時)?

【註】洲崎に曾宮一念を紹介するのは大正七年(一九一八)七月七日付け洲崎宛書簡

「今僕の友人でか成り有望な畫家(曾宮一念氏)ガ病氣で困つて居るのですが、君
一つ繪を買つて上げてくれませんか」とあるので、それ以降となる。⑩の書簡に
「昨日から醫師の言ニ従つて吸入を初めました」と吸入を始めた記述があり、同
九年(一九二〇)十二月三十一日付け洲崎宛書簡に「酸素吸入もいゝのか悪る
(い)のか未だ少しも見當かつきません。何れにしてもこゝ一二ヶ月の間ハ充分に
この方法を試みて見る積です」と書いている。そして本書簡で「酸素吸入器を用
いるのを止そうか」とあるので、一、二ヶ月酸素吸入を試みた結果、一度中止し、
醫師の勧めで再度吸引を始めたという流れとなる。また、同十年(一九二一)三
月二十八日付け井原彌生宛書簡(『芸術の無限感』所載)に「病氣の方は酸素療法
の方を止してから、大體に於いて順調にいつて居ます」とあることから、⑩は大
正九年(一九二〇)十二月十一日で、この書簡は翌七年(一九二一)一月または二
月二十四日の書簡と推定される。

⑫ 大正十年四月二十八日(推定)

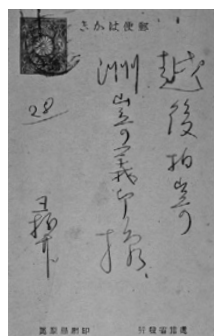
消印不明

官製葉書 ペン

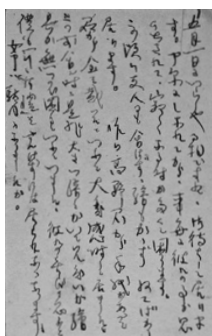
越後柏寄／洲崎義郎様／28 葬

五月一日にいらしやる相ですね。御待ちして

居ります。中原にしなれてから、事毎に彼れ
の事が思ひ出されて、寂しくなる時が多くて
困ります。／この頃ハ友人にも會はず、繪も
かゝずねてばかり居ります。昨日高野君から
手紙があつて君から金を戴いたといふて大變
感謝して居ました。この前會つ(た)時ニ是非大きい繪をかいで見度いガ繪具ガ無い
ので困るといふていました。彼れの喜びを思ふと僕も一所ニ御禮を言はずには居ら
れなくなります。女中ハダメになりましたか。



⑫-裏



⑫-表

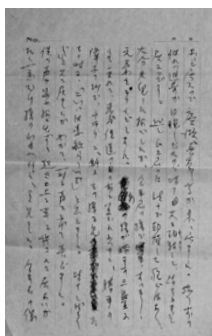
【註】 中原悌二郎が亡くなったのが大正十年（一九二一）三月二十八日。文頭「五月一日にいらしやる相ですね。御待ちして居ります。中原にしながらから、事毎に彼れの事が思ひ出されて、寂しくなる時が多くて困ります。」とあること、文末に「女中ハダメになりましたか。」とあり、同年二月五日付け洲崎宛書簡では「ばアヤはこちらでもまだ見ツかりません」とある女中を探しているが「昨日から御ばさんが急に悪くなつて寝込んで終はれたので今は何よりもこれが一番の苦痛です」と衝突していた岡崎きいが出て行くこととなつて、女中探しをしている中できいが倒れてしまい困り切つてしまったのだろう。そして五月一日に洲崎が来るのを待ち望んでいる。同年五月十八日付け洲崎宛書簡には「御ばさんも今度ハ大變やさしく親切にして居ります」ときいの病気が治り、逆に世話になつてしまったことやさしくなつたとわかることから、中原悌二郎死後の五月一日前の大正十年（一九二一）四月二十八日に書かれたものと推察される。

⑬ 大正十年九月十二日（推定）

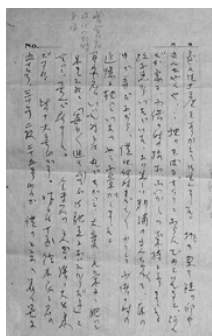
年月不明十二日

便箋（23・3×15・6 cm）四枚のみ

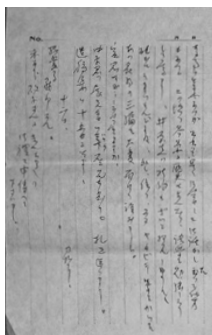
ペン



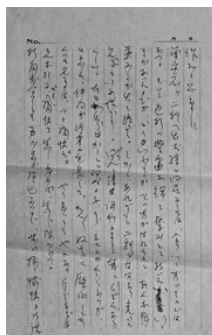
⑬-2



⑬-1



⑬-4



⑬-3

（一紙）色々御土産をありがとう御坐いました。桃や梨や鮭の卵やきんちゃくや：枕のそばにずらりとならんだのを見ると、何んだか急に、小供の時の様な、なつかしい氣持になりました。政子さんからいたゞいた、あの美しい刺繡のきんちゃくを、床の中で弄びながら、僕は何時までもく／＼かうして小供の時の追憶に耽つていたいやうな氣がしました。／曾宮君ハいつた時とは丸でちがつて、大變、元氣に、肥つて来ましたね。毎日く／＼迎もムキな御馳走になつたからだよ」と言つて、喜んで居ました。金平君のこんどの繪ハ大出來ですね。皆ナ大喜びです。昨日は丁度鈴木良三君の五十號、三十號二枚二十五號等ガ僕のところへ着く筈に／

（二紙）なつて居たので廣瀬、長太郎等ガ來て居ました。旅行前の彼れの進歩が目醒しかつたので皆ナ大に期待して、待ちにまつて居たのです。然し良三君のは皆ナガ期待した程ではなく大分失望した様でしたガ、金平君の繪ですつかり、元氣をとりましたました。あの繪ガ勝手の三疊にもちこまれて、未だ僕達の目の前二置かれないう中、勝手の障子の所で、チラリと、斜にその繪を見たその時に、「こいつは素敵らしいぞ」と思ひました。皆ナしばらくじつ／＼と見て居ましたガやかて、一時に聲を上げて喜びました。／僕の聲か思ふ様ニ出ず、起き上る事を許されて居ないガた、一度だけ繪のわきへ行つて、よく見ました。金平君の傑／

（三紙）作だと思ひました。／曾宮君の二科へ出した繪ハ同君としては、餘りい、方のものではない。もつと色彩の豊富な輝と厚みとを持つた、いゝものガあつたのだガ、どういふものかその方がはれられて、あんな月竝なものガ出て終つた。しかし、あれでも二科ではかなり光つて見へるといふ話です。同人の繪は評判によると年々ひどくなるらしい。たとへ自分はかうして何時になつたら立てるか分らないガ、とにかく、仲間ガ次第二生長して、たん／＼奴等を壓倒して行くのを見るのは、チト痛快だ。やり度くてもやれない自分などはこんな□にでも痛快を感じなければ、感じ様がない。／折角お會しても聲ガ思ふ様ニ出ないので、前の様ニ愉快に御話／（四紙）する事ハ出來ないガそれでも早く御會して御話ガし度くて仕方がない。この頃ハ□氣に歴史をよんだり、語學を勉強したりして居ります。井原さんの新約もざつと拜見しました。確かにうまいもんですね。然し、僕ハ、ユタヤタビテ等をかいたあの最初の三編を大變面白く讀みました。／宮君はどうして居ますか。／中原君の展

覽會ハハヤク君ニみせ度い。札を送ります。／遺稿集ハ十五日に出ます。／十二日／
葬／敬愛する義郎兄／末ながら政子さんにきんちやくの御禮を申傳へて下さいまし

【註】「曾宮君の二科へ出した繪ハ」とあり二科展は毎年九月中旬から下旬に開催されており、曾宮が入選するのは大正十年（一九二一）から十二年（十三年落選）であり、文末の中原悌二郎の遺稿集とあるのは同十年（一九二一）九月刊の福田久道編『彫刻の命―中原悌二郎とその芸術』（アルス社）と考えられることから、大正十年（一九二一）九月十二日の書簡と考えられる。

⑭ 大正十年十二月六日（推定）代筆

□・12・6 消印

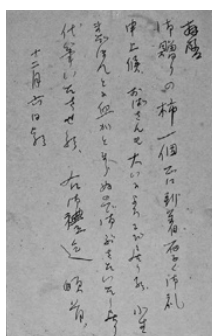
官製葉書 ペン

越後刈羽郡比角村／洲寄義郎様／東京下落合四六四番地／中村彝

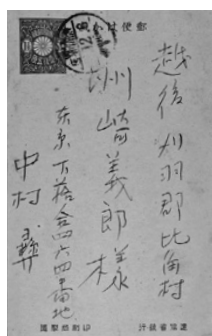
拜啓／御贈りの柿一個正に到着厚く御禮申上候。おばさんも大いによろこび居り候。小生まだほんとに血がとまらぬので御ぶさいたし居り代筆いたさせ候。右御禮迄 頓首／十二月六日朝

【註】十二月六日前後の洲崎宛書簡内容等

から、大正九年（一九二〇）から十一年（一九二二）の三年間の十二月六日の書簡と考えられる。中村彝画集（日動出版部昭和五十九年）の年表に「大正十年十一月下旬、ひどい咯血が続く」とあるのでこの時期の岡崎きいによる代筆と思われる。



⑭-裏



⑭-表

⑮ 大正十一年六月十日（推定）

□・6・10 消印

絵葉書 ペン

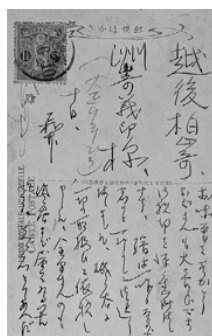
越後柏寄／洲寄義郎様／十日／彝

お味噌をありがとう／おばさんも大喜びです／御親切を深く感謝致します。繪は一昨日曾宮君のと一所^{ママ}にして御送り致しました。磯ヶ谷に一切の取扱ひを依頼し萬した。金平さんの磯ヶ谷まで、届いてゐる筈です。先ハ右とりあへ須

（裏面）第八回二科美術展覽會出品／人物 安井曾太郎氏筆

【註】安井曾太郎《人物》が出品された第八回二科美術展

覧會は大正十年（一九二一）九月九日から二十九日まで開催。川村記念美術館顧問前川公秀氏の御教示により絵葉書の表面の通信欄が二分の一になるのは、郵便法の改定で大正七年（一九一八）三月一日からということにも合致する（③はそれ以前なので三分の一の通信欄）。彝の記載日付が十日で、消印も六月十日であることから、第八回二科展開催三カ月前に使用されることはあり得ないので大正十年であることはない。③同様に展覧会后、遠くない時期の使用と考ええると、大正十一年（一九二二）六月十日の書簡と考えられる。曾宮一念と一緒に送ったという絵が何かは不明。



⑮-表



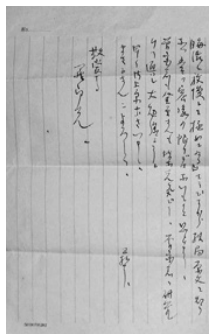
⑮-裏

⑯ 大正十一年秋(推定)

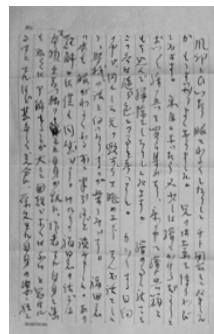
日付不明

便箋(23・5×16・1cm)二枚のみ ペン

(一紙)風邪をひいたり眼をわるくしたりしてチト閉公してゐましたがもうすっかりよくなりました。兄の御上京を待ちわびてゐます。来月二なつたらまた少しは繪もかけるだらうとおい／＼繪の具を買ひ集めたり、床の中へ繪の具箱をもち込んで掃除をしたりしてゐます。繪の事二就いてもこの冬は随分色々の事を考へました。カン／＼する日向の中で、圓々した兄の頸すぢを眺めながらそんな話をしたり、學校の話を伺つたりするのガ樂しみです。福田君の本も眼かわるくなる前二半分ほど讀みました。あの難解には僕も同感です。けれども福田君の話では『本物(原書)獨の□□』それ自身が既に、作者それ自身と□も恐らくは了解することガ大して困難でなくはないと思はれるほどそれほど甚たしく、充分に、原文それ自身の姿ニ於て／



⑯-2



⑯-1

(二紙)晦渋と放慢とを極めてゐる』そうですから結局原文を知らない吾々の□像の限りではないものと思ひます。／曾宮君も金原さんも皆な元氣です。曾宮君ハ研究所へ通つて大勉強です。／早く御上京なさつていまし。／まさ子さんニよろしく、

彝／敬愛する／義郎兄

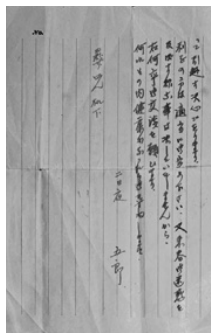
【註】「福田君の本」が何を指すかは不明。「曾宮君ハ研究所へ通つて大勉強です」とあることから、曾宮一念が川端画学校で学んだことを指すのであれば、大正十一年(一九二二)秋頃か。

⑰ 大正十一年九月以降、二日(推定) 遠山五郎から中村彝宛

年月不明二日

便箋(23・6×16・0cm)三枚のみ ペン

(一紙)其後御健康は如何ですか。盛んに描いてるといふ事を先日曾宮君から伺つて大變好都合だと思ひました。まああまり無理せず健康第一に祈ります。僕も二三枚描きました。二三日前から急の寒さで鼻風を引いて困りました。もう殆んどよくなりましたが／＼御勉強中貴兄の御手をわずらはす事を大變御氣の毒に思ひますが僕の交渉した四國の人から漸く回答がありまして今すぐといふ事は出来ぬが少しさきになつたら少し位いの金の運用は出来るからこの冬か明春までまつて來れといつて來ました。處がまてないのは目黒の家でこの頃の雨でみじめなほど雨もり(もりといふより流れています)がしてこのまゝ、春までまてば家はだいなしになつてしまひます。それで先日から二三の家根やに見せましたら一人は二百五／



⑰-3



⑰-2



⑰-1

(二紙)十圓といひ一人は二百三十圓、今一人は百五十圓といひますので第三の者にたのんで修理させやうと思ひます。壁やはまだとても駄目と思ひますが見つもらせた處百二十圓、大工が約百圓といひます。それで約四百圓ばかり金が至急必要となつて來ました。その事二ついで御願ひしたいのです。いつか御話の越後の御知人から借用は出來ますまいか。明年三月頃と期限して借りたのですが、半歳だけ都合してもらへば何とか必ず責任は果すつもりです。信用で貸して下されば之に越した事はありません。それでないと家の方はまだハッキリと僕の所有權はないのです。一その事實らふと思つて先日から種々人にたのんでみましたが一二來た人も畫室が用をなさぬからといつて手を引いてしまふ有様です。このまゝでは馬鹿／＼しいと思／

〔三紙〕つて引越す決心でをります。／利子の方は適當に御定め下さい。又來春御迷惑を及ぼす様な事は決していたしませんから。／右何卒御交渉を願ひます。／何れその内健康になつたら御尋ねします。／二日夜／五郎／葬兄机下

【註】本書簡中に目黒の家の雨漏りが書かれ、「いつか御話の越後の御知人から借用は出来ますまいか」とあることから遠山五郎は、まだ洲崎と面識がない頃と考えられる。遠山は大正十一年（一九二二）八月末にロシア満州周遊から帰国し、葬の画室を尋ねたが人の気配がないので帰ったと『木星 中村葬追悼号』大正十四年（一九二五）第二卷第二号に記している。また翌日、葬から書簡が届き、日が傾いた頃画室を尋ねたとも記されており、それ以降の書簡で、遠山からの依頼で葬が洲崎に取り次ぐ書簡と一緒に同封されて、洲崎の元に伝わったものだろう。

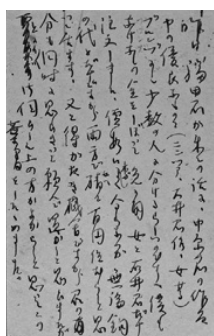
⑱ 大正十二年上半期（推定）

消印不明 年月不明十四日

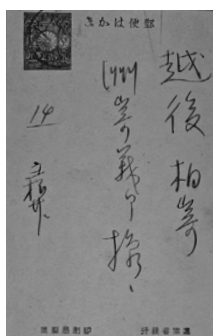
官製葉書 ペン

越後柏寄／洲崎義郎様／14 葬

昨日福田君が來ての話に、中原君の作品中の優良なものを（ニンツア、石井君像、女等）ブロンズにして少數の人に分けるらしいのです。僕もなけなしの金をしぼつて免に角女と石井君だけ注文しました。價段ハ未だよく分らないが無論銅の代とだけですから兩方で精々百圓位だらうと思つて居ます。又と得がたき機會ですから君の分も同時に思ひきつて頼んで置かうと思ひましたガとにかく御伺ひした上の方かよからうと思つてこの／葉書をした、めました。



⑱-裏



⑱-表

【註】中原悌二郎がロシアのイリヤ・ニンツァーの彫刻作品《若きカフカス人》を制作するのが大正八年（一九一九）八月、石井君像（石井氏像（石井鶴三像）の制作は、同五年（一九一六）。「女」は特定出来ない。「ニンツァ」の制作以降なので、同八年以降、悌二郎の生存中の頒布か、没後の頒布かが考えられる。文末に「又と得がたき機會ですから君の分も同封に思ひきつて頼んで置かうと思ひました」とあることから御伺ひした上の方かよからうと思つてこの葉書をした、めました。」とあり、同十二年（一九二三）十月二十一日付け洲崎宛書簡に「中原の彫刻は伊藤君の方で來春まで待つてくれまいかといふことでしたガ、中村様の方の關係上そういふ譯二いきそうもないので」とあることから同十年中原が没した後の頒布で、同十二年上半期頃の可能性が考えられる。

⑲ 年不明五月二日

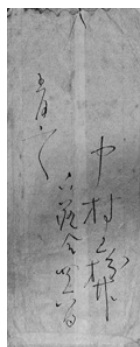
年不明五月二日

定形封筒のみ ペン

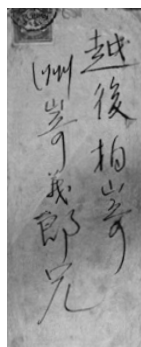
（表）越後柏寄／洲崎義郎兄

（裏）中村葬／下落合四六四／五月二日

【註】消印不明、表書きのみなので特定できず。



⑲-裏



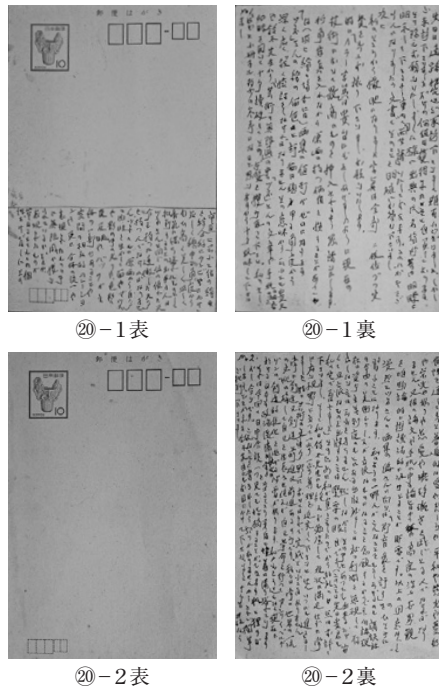
⑲-表

⑳ 昭和四十七年十月頃（推定） 洲崎義郎から講談社宛（未投函）

官製葉書（未投函）二枚 ペン

（一通目裏）先日は遠路拙宅迄ご来訪下さりまして難有ふございました。しかしご来訪下さいましただけの価値は獲得されたことと自負しております。その際もお願いいたしました様に出版の氏名場所等は明瞭に明示して下さいさるよう重ねて『要請』い

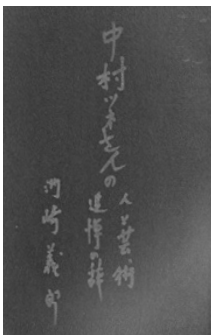
たしておきます。このハガキをこらんにになりましたら文書でそのことを明確にお答え下さいまし／次に／私のところから撮映になりました写真眞は全部二枚位づつ実費をもつてお譲り下さいましお願いいたします。／特に「カラー写真眞」は貴台にもをしあげましたように現在の技術において最高のものを挿入されるよう懇請いたします。折角写真を入れながら原画の持つ価値を損することがあつては（特に繪の場合には）画集の値打ガゼロになります。／「ツネ」さんの繪の価値と評価は總申る角度から深く広く、鋭く検討をしなければなりませんその意味から云ふても貴兄や鈴木先生から「芸術の無限感」の中の「ツネ」さんの文章や手紙の内容等を心眼を開いて十分讀破してその本質を攫み取つて下さい。私のさしあげた小冊子も多少の参考になると思いますから充分玩味して下さいまし／



（二）通目表下部率直に云ふと彼の繪を総合的にランビキにかけて正しく總申る角度から匂ひ高く美しく正しく香氣に満ち溢れたものとして批判することの出来る人はツネさんと同じ位の優れた天分を持つた透徹した天分を持つ人ではなければなりません。ツネさんの原画から自分の肉眼と生かして面やマツスや影の中の光りや、色彩の反映や、バックが主体の一部であることや空間の相互的ハレーションや更に全体の統一や表現されたものの中に無限感が攫りられているかどをガ、表現されたものが單なるものの個性だけでなしにその／

（二）通目裏個性を通してもつと普遍的な愛や、悲しみや、平和や慈光や憂愁や榮光や怒りや慈愛や琉玲瓏さを感じとる人でなければなりません。又彼の論文や手紙の中の論旨からの高度の深い世界觀を唯物論的に辯證法的に汲みとることガ肝要です。以上の用意なくして漫然とツネさんの画集の編さんに向いば「郡育象を評す」のをひそみに習ふことになります。私のような一野人ガこんなことををしあげるのも講談社の今回の美術シリーズガ立派なものになることを念願するからです。勿論現在の資本主義制度のもとにある出版社として御社の利潤を無視して存立しないことは云ふをまちません。然しながらその中にあつても出来るだけ安くて且立派なものを出版することは緊要の眼目です。（このことは先日貴君も私の宅で云はれました）そのために私が直言したので（す）から非礼の点はお許し下さいまし。そして私は鈴木先生にも絶えず勉強して現状に満足せず常に広い視野に立つて一步一步眞理を追究して下さいとせんいつにも進言しました。特に芸術の分野においてはこれで完成といふことはありません常に創造又創造、前進又前進あるのみです。我々は常に世界の一流の文化に接して自己を生長させ絶えず自己革命を行へてアンリイベルゲゾンの「創造的進化」を逃げる必要があります。私ガもをす迫もなく現在に於ける日本の政治經濟文化は至るところ矛盾と撞着に満ち溢れていますそれは今回の日中会谈一つ見ても指摘することができます狐と狸のばかし合いです。こんなことを書き出したら切りがありませんからこれで擱筆します。どをかこれを鈴木先生にもお目にかけて下さい。そして十分にご批判下さいまし／左様なら

【註】 本文は、官製葉書二枚に亘つて書かれているが、送り先が空欄で、講談社の葬の美術シリーズ編纂担当に送ろうとしたものと考えられる。この美術シリーズは『日本の名画』で昭和四十七年（一九七二）に三十七巻・鈴木秀枝編中村彝が刊行されている。文中にでてくる洲崎が送ろうとした小冊子は、大正九年（一九二〇）十月九日に洲崎が記した葬論と同十四年（一九二五）一月七日に葬没後直後に書いた追悼の辞を、後年の昭和四十六年



図版

(一九七二)にまとめて私家版として配った『中村ツネさんの人と芸術追悼の辞』(菊判十六頁昭和四十六年十二月二十五日発行 図版参照)を指すと思われる。「日中会談」とあるのは、田中角栄首相(刈羽郡二田村(現柏崎市)出身)の毛沢東、周恩来との会談を指し、昭和四十七年(一九七二)九月末の日中国交正常化会談である。この会談直後くらいの書簡であらう。

【参考文献】

- ・『木星』第二巻第二号・中村彝追悼号 木星社 大正十四年(一九二五)二月一日発行
- ・鈴木良三『中村彝の周辺』 中央公論美術出版 昭和五十三年(一九七八)四月二十五日再版
- ・鈴木秀枝『中村彝』 木耳社 昭和五十三年(一九七八)十月三十日再版
- ・日展史編纂委員会編『日展史6 帝展編一』 日展 昭和五十七年(一九八二)六月二十七日
- ・『藝術の無限感』新装版 中央公論美術出版 昭和五十八年(一九八三)三月十日三版
- ・米倉守『中村彝 運命の図像』 日動出版部 昭和五十八年(一九八三)九月二十日
- ・『洲崎義郎回想録 進歩と平和への希求』 洲崎義郎回想録刊行会 昭和五十九年(一九八四)九月三十日
- ・『中村彝画集』 日動出版部 昭和五十九年(一九八四)十月一日
- ・川崎久一『死んでも一枚の絵を描きたい 中村彝と洲崎義郎の軌跡』 柏崎週報社 昭和五十九年(一九八四)
- ・二科七十年史編纂委員会編『二科70年史 1914 - 1983』 二科会 昭和六十年(一九八五)八月二十六日
- ・静岡県立美術館編『静岡の美術Ⅰ 詩情の洋画家 曾宮一念』 静岡県立美術館 昭和六十二年(一九八七)
- ・日本美術院百年史編纂室編『日本美術院百年史 四卷』 日本美術院 平成六年(一九九四)五月
- ・新潟県立近代美術館編『中村彝・洲崎義郎宛書簡』 新潟県立近代美術館 平成九年(一九九七)十一月一日
- ・田原市博物館編『中原悌二郎と岡田虎二郎 自然の理法・悌二郎をめぐる作家達』 田原市博物館 平成十九年(二〇〇七)